

【短 報】 野生動物

ネズミ駆除用粘着シートに誤捕獲された ハイタカおよびハクセキレイの救護症例について

岡田 東彦 木村 優樹 林 美穂 松倉 未侑 浅川 満彦

酪農学園大学獣医学類 医動物学ユニット／野生動物医学センター WAMC
(〒069-8501 江別市文京台緑町582)

要 約

2021年4月、江別市内の一般家屋屋外に設置されたネズミ駆除用粘着シートに誤捕獲され、飛翔不能となっていたハイタカ1個体と既に翼や趾にその粘着物が付着した状態のハクセキレイ2個体が酪農学園大学野生動物医学センターに搬入された。これらに対し、市販の植物油と小麦粉を使い、風切羽などの先端を切り落とす処置も行い、粘着シートから取り外すことができた。翌朝、無事、放鳥できた。この時、飛翔能力には影響がなかったことが確認されたので、同様な症例に対峙した場合、推奨されるものと考えられた。

キーワード：ネズミ駆除用粘着シート、小麦粉、風切羽先端切除、ハイタカ、ハクセキレイ

-----北獣会誌 65, 189~191 (2021)

野鳥がネズミ駆除用粘着シート（粘着シート）に捕獲される事例はしばしば発生しており、酪農学園大学野生動物医学センター（WAMC）においても過去に報告がある^[1,2]。この他、自治体が運営する鳥獣保護センター等においても同様な報告が数多くある。野生動物の救護要因は様々であるが、鳥類における粘着シートへの誤捕獲は人為的要因のひとつにあげられ、統計上、その件数は少なくない^[3-7]。しかし実際に、どのような処置が行われたのかは、あまり記録に残されていない。

2021年4月中旬、江別市内で、屋外に設置された粘着シートに誤捕獲され、飛翔不能となっていたハイタカ雄成鳥1個体および翼や趾に粘着物が多量に付着した状態のハクセキレイ雌雄成鳥2個体が一般市民により救護され、WAMCに収容された。持ち込んだ市民に対しては江別市環境課に顛末を報告するように指導した後、これら3個体の搬入を認めた。適切な処置後に無事、放鳥できた。類似事例に対応するための参考になると考え、本症例を報告する。

症 例

症例1：ハイタカ（WAMC登録番号 AS 18457）、雄、成鳥、1個体。搬入後直ちに感染リスク管理のため喉頭スワブを採取し、インフルエンザウイルス簡易検査キット（QuickNavi-Flu：デンカ、新潟）およびウエストナイル熱ウイルス簡易検査キット（VecTest WNV Antigen Panel Assay：Microgenics、CA USA）を用いて、陰性結果を確認後、粘着物の除去処置とケアが行われた。なお、対象が猛禽類であったことから、鋭い嘴や爪により術者が受傷する危険性があったため、専用の革手袋を着用し一連の作業を行った。症例1は両翼の殆どが腹側で粘着シートに密着した状態であった（**図1左**）。まず、市販植物油を用い、粘着物の除去を試みたが、接着範囲が予想以上に広範であったため、市販小麦粉を付着部にまぶして粘着性を軽減させて、風切羽先端を切り落とす処置も併用した（**図1右**）。鳥類は風切羽を切断することにより飛翔が困難となる上、新たな羽が生え替わるまでに時間を要するため^[5]、十分に注意を払いつつ実施した。約2時間半を掛けて無事、粘着物から取り外すことができた。ハイタカ左翼直下の粘着シート上には、エ

連絡責任者：浅川 満彦 酪農学園大学獣医学類 医動物学ユニット
〒069-8501 江別市文京台緑町582
TEL：011-388-4758 FAX：011-387-5890 E-mail：askam@rakuno.ac.jp



図1. 搬入直後のハイタカ(左)とその処置中の様子(右)



図3. 搬入直後のハクセキレイ(左)とその処置中の様子(右)



図2. トラップ上のエゾヤチネズミ死体

ゾヤチネズミ1個体の死体が確認された(図2)。ハイタカは非常に元気があり、羽ばたき意欲と食欲が認められたので、翌朝に放鳥することを決定し、その夜は自由な飲水と給餌(鶏ササミ)の後、WAMC内の入院室で経過観察した。翌朝、放鳥時には、風切羽の先端を切除した影響を見極めつつ放鳥した。少なくとも、この時、飛翔能力には影響がなかったことが確認された。

症例2：ハクセキレイ2個体(AS 18458およびAS 18459；図3左)は、持ち込んだ市民が自身で粘着シートから外した状態で搬入された。症例1と同様に喉頭スワブを採取してスクリーニング検査を実施し、陰性を確認した。翼や趾に多量の粘着物の付着が認められた。ハイタカ同様、小麦粉を用い、逐次羽を切り落としながら粘着物を除去する処置を行った(図3右)。これら個体も、処置直後から飛翔意欲があり、また、体力も十分残っていたと判断されたので、同じく、搬入日の翌早朝、同市内某所にて放鳥し、飛翔に影響は認められなかった。

以上、2つの症例について江別市環境課に顛末を報告した。

考 察

ハイタカは環境省のレッドリストにおいて準絶滅危惧(NT)に指定され、希少種保全の観点からも配慮が必要な種であった。今回の症例では、最初に捕獲されたエゾヤチネズミの捕食を試みて誤捕獲されたと推察された。誤捕獲された鳥類は多くが自力飛翔不能となり、外傷や体力の消耗により死亡する事例も多いため、大きな脅威となっているが^[4,5]、今回は無事、放鳥できた。

野鳥を粘着シートから解放するための処置として、小麦粉等の粉状物を使用する方法や植物油により粘着物を溶解させる方法が一般的に用いられている^[3-5]。また、今回は除去不可能であった粘着物については、風切羽を含む正羽の先端を切除した。しかし、放鳥時に観察した限り、飛翔には影響が認められなかったため、今後、同様な症例に対峙した場合、推奨されるものと考えられた。

なお、植物油を用いて粘着物を除去する場合には、事後に中性洗剤等で油分を落とす方法もあるが、洗浄は個体に与えるストレスは大きく、特に、今回のハクセキレイのようなサイズの小さい個体では体温低下等の危険を伴うであろう^[5]。

粘着シートは安価に購入可能な点や設置が容易な点から、罫としての利用が普及している反面^[4]、屋外設置した場合に意図しない野生鳥獣が粘着シートに誤捕獲される事例も多く、使用に際しては細心の注意が必要である。傷病救護の現場からは、発生防止のため屋外設置は控えるべきとする見解もある^[4,5]。

引用文献

- [1] 吉野智生、上村純平、渡邊秀明、相沢空見子、遠藤大二、長 雄一、浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護の記録(2003～2010年度)、北獣会誌、58、123-129(2014)
- [2] 古瀬歩美、牛山喜偉、平山琢朗、吉野智生、浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにお

-
- ける傷病鳥獣救護の記録（2011～2014年度）、北獣会誌、59、184-187（2015）
- [3] 京都市立動物園野生鳥獣救護センター：野生鳥獣救護センターだより、2010（2011）
- [4] 神奈川県自然環境保全センター自然保護課：自然保護課だよりかわせみ通信、17号（2019）
- [5] 福島県環境創造センター附属野生生物共生センター：救護棟カルテ、7冬号、あだたら森の回覧板（2019）
- [6] 環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室：行政における傷病鳥獣救護の考え方と地域の取組み事例、1-52（2018）
- [7] 社団法人日本獣医師会：日本獣医師会野生動物委員会報告、野生動物救護のあり方（野生動物救護対策の現状と活動のあり方等）（2005）